

2 1 世紀の日本のかたち（90）

建築について（4）

時代を映す大学キャンパスのかたち —早稲田大学の場合



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

1. 早稲田キャンパスの原型

大学、大学キャンパスはそれぞれの立地する場所において、青年たちを中心とした教育研究、知の拠点として存在し、時代を鏡のようにそのかたちに映しています。

早稲田大学は1882（明治15）年、大隈重信を学祖として創設、開校された私立大学です。場所は都の西北、早稲田の田圃の中、大隈邸に隣接する素朴な校舎からの出発でした。生徒数は政治経済学科、法律学科、理学科（2年余で廃止、1909年理工科として再置）、英学科の4学科、約80名と小ぢんまりとしたものでした。早稲田大学に改称されたのは1902（明治35）年になってからのことです。

田圃の中の最初の校舎 創設期の大学



現在の早稲田大学は発祥の地にある本部キャンパス（早稲田キャンパス）の他に、大久保キャンパス（理工学部）、戸山キャンパス（文学部・文化構想学部）、所沢キャンパス（人間科

学部・スポーツ学部）、そして北九州キャンパスと地域を広げ、かつ海外の多くの大学と交流するグローバル・ユニバーシティとしてネットワークを広げております。

早稲田大学は創立から125周年（2007）を超え、150周年（2032）に向けて、21世紀、グローバル化する時代の要求を受け入れつつ新しい展開を試みております。

21世紀の大学の姿を東西文明の融合をイメージしていた大隈呂敷の大隈にはおおいに愉快なことにちがひありません。

大隈自邸、大隈庭園を活用することで始まった私立大学早稲田のその後の姿形は今に至るまで学祖、大隈重信（1838～1922（天保9～大正11））の思想や立ち位置が大きく影響しているように思われます。

大隈重信自邸（1910（明治43）年頃）



大隈たちの創り上げた私立大学の建学の理念「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」は、現在も維持されております。

早稲田キャンパスの中心に大隈のにらみの効いた堂々たる銅像（朝倉文夫作、明治40年10月除幕）が立っております。

私大の大学づくりにあって、創立期、未来への意志を示す「理念」に添えて、校歌も大きな役割を果たします。創立25周年、明治40（1907）年の式典に合わせてつくられた校歌、相馬御風作詞、東儀鉄笛作曲はキャンパスの時空を貫くように今も学生、OBに歌い継がれております。

「都の西北 早稲田の森に 聳ゆる薨は われらが母校 われらが日ごろの 抱負を知るや 進取の精神 学の独立 現世を忘れぬ 久遠の理想……」そして、わせた わせた わせた とエールが続きます。

明治期の早稲田大学には今日に続く早稲田の内容とかたちの原型が造り込まれています。そして大正、昭和（初期）、早稲田大学のキャンパスは、教学のための薨の校舎に加えて大隈講堂と図書館が造られ、大学らしい体裁が整えられてゆきました。

大隈記念講堂（21号館）

学祖の名を冠した大隈講堂は、昭和2（1927）年、創立45周年に合わせて竣工し、この年、5,000人が集って盛大な記念行事が行われたと大学の記録にあります。

建築の特徴は、Wの王冠の時計塔、外観はスクラッチタイル張りの壁の多いゴシック風、大隈講堂は舞台から肉声が客席の隅々まで届く音響効果抜群の劇場空間としても有名になりました。時計塔の高さは当時の建築高さ制限100尺を超えて、「125尺」に設定されております。

大隈講堂 外観



※1927（昭和2）竣工 創立45周年 オーディトリウム 音
抜群 125尺の塔

大隈講堂 内観



「人間は本来、125歳までの寿命を有している。適当なる撰生をもってすれば、この天寿をまっとうできる」

この大隈説から早稲田大学は「125年」をもって一世紀としているのです。

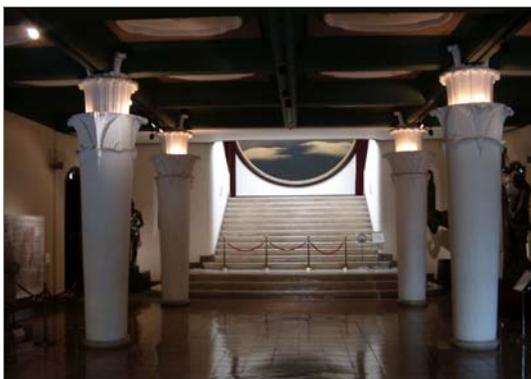
大隈講堂は、日本の総理大臣、アインシュタイン、トインビー、ネール印度首相、クリントン米大統領、江沢民中国国家主席他の講演の舞台としても活用されてきました。この講堂は時代を耐え抜いて存在し、今も早稲田大学のシンボルです。設計は佐藤功一・佐藤武夫、内藤多仲（構造）と当時の早稲田建築学科教授陣です。

平成11（1999）年、大隈講堂は東京都歴史的建造物第1号に選定され、続いて、国の重要文化財にも指定されました。

會津八一記念博物館（2号館・旧図書館）

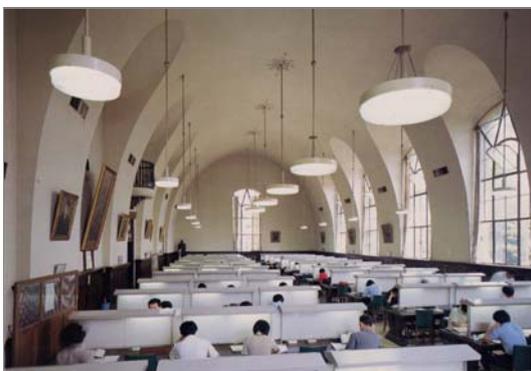
大隈講堂とともに東京都歴史的建造物に指定された建築に、1925（大正14）年竣工の図書館があります。当時、建築学科の新進の助教授、今井兼次の設計です。ヴォールト型の高い天井からのシャンデリアのある大閲覧室には私も通いました。1階入口ホールには左官職人が精確込めて仕上げた花模様の冠を持った6本の柱があるのですが、まるで美術作品です。戦前には左官にしろ大工にしろ、優れた職人が大勢おりました。この職人たちが日本における近代ヨーロッパ建築の移入に際し、その根底を支えたことに改めて気付かされます。

1階入口ホール



1915（大正4）大正天皇即位記念事業、1925（大正14）竣工
ディテール、鉄筋コンクリート造

旧図書館閲覧室



この図書館は現在會津八一記念博物館となり、東洋美術史家會津八一の収集した東洋美術品の

展示空間となって一般に公開されています。図書館の機能はかつての戸塚球場に総合学術情報センターとなり、姿を変えてグローバルな現代情報社会と向き合っています。

演劇博物館（坪内博士記念演劇博物館）（5号館）

本部キャンパスに在る演劇博物館（昭和3（1928）年竣工）は戦災で半壊しましたが、創立70年に再建・改装され、現在おおいに活用されております。今井兼次設計のこの建築は坪内逍遙のシェイクスピア全40巻の完訳を記念し、シェイクスピアの劇場、フォーチュン座をモデルに建てられました。ハーフティンバーの柱と漆喰壁、赤い屋根瓦の演博は、秋、銀杏並木が黄金色に染まる時、見事な学苑のヴィスタを浮き上がらせます。

演劇博物館



※1945（昭和20）東京大空襲により破壊、のち再建される。

これら記念的建築物を加えつつ、大正・昭和前期の早稲田キャンパスは従来の木造校舎を5階（地下1階地上4階）建ての葺屋根のコンクリート造に換えて、拡充、拡張してゆきました。

キャンパスの構成原理を守りながら、赤い棟瓦を冠した5階建て、鉄筋コンクリート造りの校舎、1号館、3号館、6号館、8号館、11号

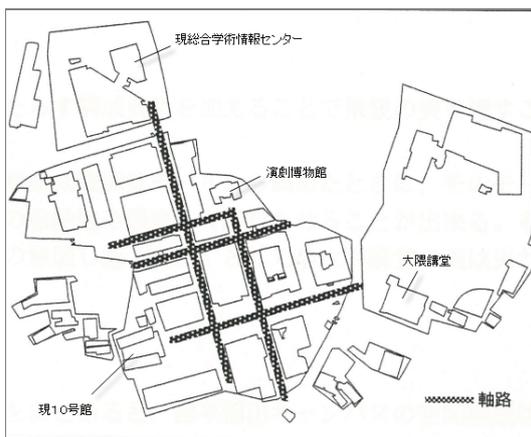
館が昭和6年から13年の間に次々と造られました。設計は大学の施設部営繕課（桐山均一氏他）ですが、入り口や窓廻りなどの細部に気配りがなされ、丁寧なつくりで落ち着いたキャンパス風景をつくり出しました。

早稲田キャンパスの空間構成原理

早稲田キャンパスの建築計画には建築学教室の歴代の教授陣が多く関わっておりますが、明治期から都市美論を提唱していた佐藤功一は、膨張するキャンパス全体の組み立ての方針を定めしました。

① 軸

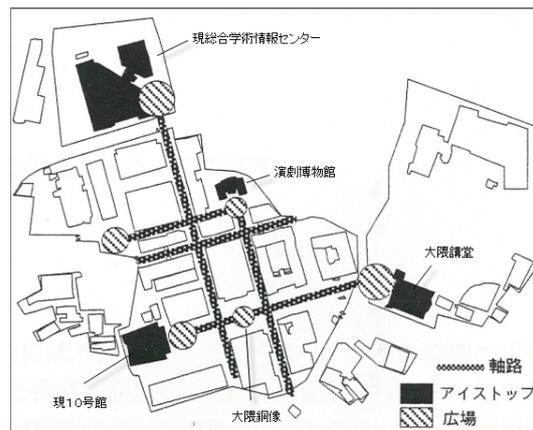
この方針より、大正天皇御即位御大典記念事業（1915（大正4）～1925（大正14））を期に、キャンパスプランは広場中心型からグリッドを持った直線型に大きく変更されています。新築建物は恩賜記念館と高等商科教室（現11号館）の軸にあわせて配置されています。これは、地形の最大傾斜方向でもあります。このとき設定された軸とこれに直交する軸がキャンパスの骨格となる重要な空間構成原理になっています。



② アイストップ

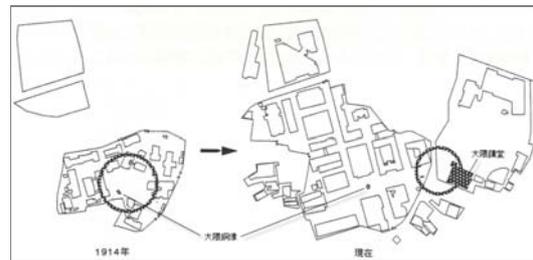
総長大隈侯爵記念事業（1922（大正11）～1928（昭和3））において大隈記念大講堂が建設さ

れ、続いて演劇博物館が建設されていますが、この後すぐに、創立50周年記念事業（1932（昭和7）～1938（昭和13））で正門～大隈銅像へのメイン・ストリート（大隈講堂モール）と南門から演劇博物館へのモール（演劇博物館モール）が形づくられていることから、この二つの建物をアイストップとした象徴的な景観をつくらうとしていたことがわかります。



③ 広場

当初、学生を集め総長や学長その他の人々が演説訓話をする為にキャンパスの中心である大隈銅像前に広場を設けていましたが、大隈講堂の完成により広場は、大隈講堂前へ移動させています。



資料：『西早稲田キャンパスグランドデザインに関する調査』
早稲田大学キャンパスグランドデザイン研究会（戸沼他）、2001年3月

明治の創成期、田圃の中に造られた早稲田大学が大正、昭和と全国から学生が集まるように

なって、キャンパス周辺に学生街が出来上がっていった様子を示す一文があります。

「この時期、学苑界隈の景観も大きく変貌していった。市電をはじめとする東京の交通網の整備により、学苑付近に集中していた下宿屋は次第に周辺に拡張し、学苑生の遊びの地も神楽坂から新宿へ移っていった。しかし、学苑周辺には、本屋、飲食店、カフェ、バー、麻雀屋等々、学生生活を彩る早稲田学生街が広がっていた。

全国各地から集まって来たワセダの学生は、学内景観だけでなく、学苑界隈の景観をも、心のふるさととして胸中に収め、広く社会に出て活躍したのである。そのような心象風景を抱いた校友にとって、母校の発展は他に勝る誇りであった。」

資料：「大正・昭和前期の早稲田大学（資料目録）」早稲田大学大学史編集所資料

2. 戦争と戦災

昭和16年から20年の太平洋戦争では昭和時代の青年たち、大学生、早稲田の学生も戦争に駆り出されました。出陣学徒壮行の地、明治神宮外苑競技場での痛ましい学徒出陣式はしばしば報道されますが、早稲田大学でも戸塚球場で行われた学徒出陣の生々しい写真が残っています。そして大勢の学徒が再び学園にもどることはなかったのです。

戸塚球場で行われた学徒出陣式



学徒出陣の生々しい写真



この戦争によって日本の国土は広島、長崎の原爆投下を含む米軍の大空爆によって焦土と化しましたが、早稲田のキャンパスも手ひどく被災しました。コンクリート造の薨の校舎と図書館、大隈講堂などは無事でしたが、昭和20年5月25～26日の米軍の焼夷弾投下によって、木造校舎全焼、大隈会館全焼、恩賜記念館廃墟、演劇博物館半焼と、キャンパスの35%を失うことになりました。そして昭和20年8月15日終戦の日を迎えました。

半焼した演劇博物館



外郭を残して焼尽した恩賜記念館



戦災図（キャンパスの35%を失う）



大学は昭和 20 年 9 月には授業をいち早く再開しているのです。大学は散り散りになった学生たちにとってまず帰るべきふるさとでした。

3. 戦後 70 年の学園の変貌

早稲田大学の戦後 70 年は敗戦日本の復旧、復興の歴史に重なります。

大学は終戦後、いち早くキャンパスの再建に取り組みました。昭和 20 年代、無事であった鉄筋コンクリート造の校舎を活用しつつ、焼失した木造校舎に替えて 7 号館、8 号館、12 号館と鉄筋コンクリートに建て替えました。

続いて昭和 40 年代、創立 70 周年、75 周年、80 周年と記念事業を立ち上げて寄付を募り、O B 他の方々から資金を集め、4 号館、9 号館、15 号館と学部ごとに校舎を建て替えてゆきました。

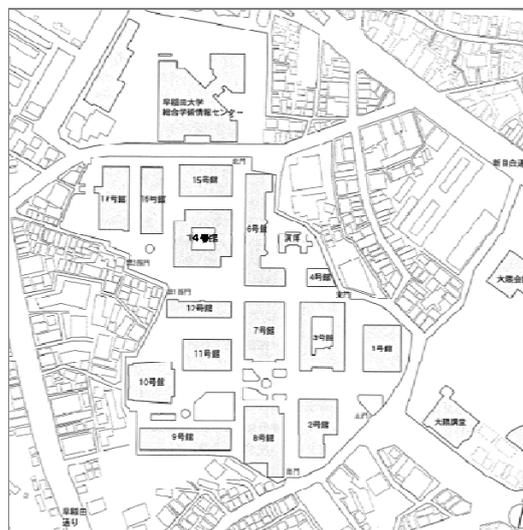
これまで理工学部も文学部も戸塚の本部キャンパス内にありましたが、理工学部は本部キャンパスでは拡充不可となり、昭和 41 (1966) 年に大久保に移転しました。私の学生・院生時代は本部キャンパスでしたが、にぎやかな戸塚とモノクロの大久保とでは文化が異なるのです。文系と理系の交叉のあるなしは大きいのですが、文学部も昭和 37 (1962) 年に戸山に移りました。

平成年代のキャンパスの情報化・高層化

20 世紀から 21 世紀を跨ぐ平成年代、早稲田大学も日本の時空に広がる情報化、グローバル

化の波を受けて一つの脱皮を迫られました。それが新図書館の建設であり、キャンパスの高層化でした。

早稲田キャンパスの現況



総合学術情報センター（中央図書館）

戦前戦後を通じて早稲田キャンパスの顔の一つであった図書館の機能が総合学術総合センターとなって、平成元 (1990) 年、容積を増加させて戸塚球場跡に移転新築されました。蔵書数は 560 万冊を超え学内各箇所の図書館とネットワークでつながり、国内有数の大学図書館であり、国際会議場も併設しております。総合監理：大学キャンパス企画部、設計：日建設計が担当しました。

20 世紀から 21 世紀にかけて、いろいろな意味で日本のかたちを変えているのは情報化、グローバル化といえますが、建築や都市の物的な姿・形を変えたものに昭和 45 (1970) 年の建築基準法の改正、地上 100 尺 (31m) の「高さ制限の撤廃」があります。これを機に日本の建築も都市もその景観、風景が一変しました。

早稲田大学においても、これまでの地上 100 尺に押さえられていた建物—地下 1 階地上 4 階

の高さから、これを超えた10階、14階、15階建ての高層建築が可能となりました。

総合学術情報センター



新14号館（社会科学部、教育学部）

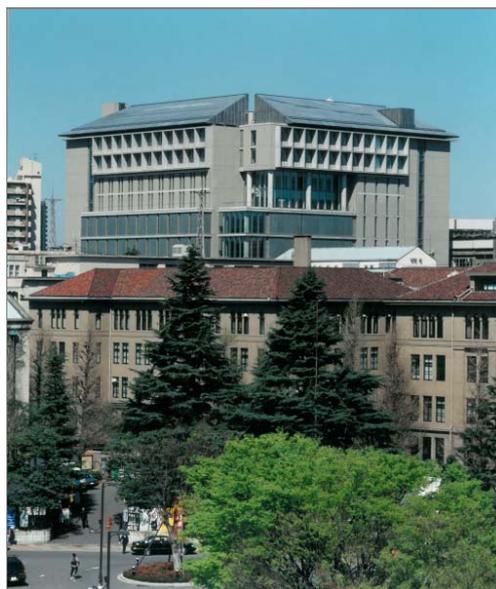
新14号館は早稲田キャンパス高層建築の第一号です。

平成10（1998）年竣工。総合監理：大学キャンパス企画部、設計：日建設計、地下2階地上10階、塔屋1階、軒高44m。ロビーからエスカレーターで上層階へ、これまでの校舎とスタイルが一変、マルチメディアを活用した授業形態と、多様な教育実現のための大型の新しい校舎づくりが試みられています。

新14号館 外観（7号館より）



新14号館 外観（早大通り上空より）



新8号館（法学部）

平成17（2005）年竣工。総合監理：大学キャンパス企画部、設計：日建設計、地下2階地上12階、塔屋1階、軒高52m。

旧図書館に隣接し、伝統的葺屋根の校舎を残しつつ、高層棟を併設しています。

新8号館 外観写真1



新8号館 外観写真2



新11号館（商学部 国際教養学部）

平成21（2009）年竣工。総合監理：大学キャンパス企画部、設計：山下設計、地下2階地上14階、塔屋1階、軒高69m。

旧11号館は昭和13（1938）年多くの商学部出身者の寄付によって造られたものですが、この校舎を利用した人々の記憶を尊重して建て替えに際し、旧11号館のエントランスを再現するなどの配慮がなされています。

新11号館 外観写真1



新11号館 外観写真2



新3号館（政治経済学部）

竣工平成26（2014）年。総合監理：キャンパス企画部、設計：久米設計、地下2階地上14階、塔屋1階、軒高68m。

昭和8（1933）年に造られた地下1階地上4階、塩焼瓦の葺の旧3号館は1号館とともに早稲田大学キャンパスにあつて最も古い建築の一つです。大学創立時から続く政治経済学部が利用してきており、キャンパスの立地上からも思い出の多い歴史的建築物です。

新3号館 外観写真1



大隈銅像と大隈講堂をつなぐ東西モールに面し、南門と演劇博物館を結ぶ南北軸上の交叉位

置にあり、これをいかに理解し表現するかが建築設計のポイントでした。

新3号館 外観写真2



現在の早稲田キャンパス整備方針においてはキャンパスを歴史継承ゾーンと高機能化ゾーンに分け、その中間に新旧媒介ゾーンを設定しております。これに対し新3号館では以下の設計方針により建設されました。

「再現棟」—外装は旧3号館に用いられていた塩焼瓦を再利用した屋根、旧3号館竣工時当時の素材・色彩を受け継ぎ、従前の面影を残す。

「高層棟」—周辺キャンパス建物と調和を考えた外観とする。再現棟の薨（=棟）部分までセットバックし、再現棟の独立感を強調する。

キャンパスの高層棟、新14、8、11、3号館はすべて最上階が屋根、棟屋を冠しており、スカイラインとして一つのまとまりをもっているのも特徴の一つです。

キャンパスの情報化、高層化は総合学術情報

センターに始まり、新3号館の建設と利用開始によって一区切りとなりました。

緑化

キャンパスには大隈庭園につづく豊かな樹木があります。

常緑高木— ヒマラヤスギ、キャラボク、シイ、ゲッケイジュ など

常緑低木— ハクチョウゲ、ヒイラギ、モクセイ など

落葉高木— イチョウ、ケヤキ、シラカバ、トチノキ など

花木— サクラ、ツツジ、サツキ など

これらの樹木は年々歳々人は変われど学苑らしさを四季折々に演出し続けています。

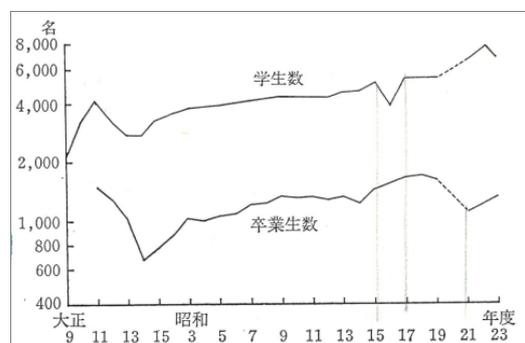
4. 学生数の推移とキャンパス

明治15(1882)年、政治経済学科、法律学科、理学科、英学科の4科80人で出発した早稲田大学は、現在約5,000人の外国人学生を含む5万人を超える学生を擁する大学となりました。

大学キャンパスの拡張、拡充、そのかたちは戦前、戦中、戦後の学生数の推移と重なっております。

<戦前>

学部の学生・卒業生数(大9~昭23年度)



資料：早稲田大学百年史(早稲田大学大学史資料編纂所)

・専門学校時代(1884(明17)~1905(明30))
卒業生：年100~300人

・専門学校準拠（1905（明38）～1922（大11））

卒業生：年500～1,000人台

・大学令準拠（1923（大12）～1954（昭29））

卒業生：2,000～4,000人台に

<戦後：新学制施行以降（1950～2013）>

学生数：昭25（24,258人）、昭30（33,743人）、昭40（42,066人）、昭50（45,121人）、平12（卒業生9,637人）、平25（卒業生9,791人）と学生数は1万人、2万人台から5万人台からへと内外の大勢の青年を受け入れてきました。これは戦後日本の人口が7,000万人台から1億2,000人台へと急増加した推移と重なります。

早稲田大学は戦後急ごしらえの校舎の中での教育、マスプロ教育とそれへの学生の異議申し立て、60年代70年代の学園紛争、少人数教育のための教室、校舎改善、学生と研究者との交わりの空間の（内容）の重視、加えて最近では情報化時代に対応するキャンパス空間のしつら

えが求められてきました。

早稲田大学キャンパスは1970年代以降、戦後ベビーブーム世代を受け入れつつ高度経済成長を続ける日本に併走するように、文学部を戸山に、理工学部を大久保に、所沢に人間科学部をと移転拡充を重ねました。早稲田のキャンパスには、現在充実したかたちで、政治経済学部、法学部、教育学部、商学部、国際教養学部研究所があり、各学部の大学院（修士・博士課程）をもっています。

現在、日本の大学の直面する大きな問題は日本の急速な人口減少、とりわけ若者層の人口現象です。戦後大量に造られた私立大学の存続が危ぶまれております。早稲田大学もこれと無縁ではなく、これに対して国際化（外国人学生の受け入れ）、社会人教育の重視などが改めて求められております。

（つづく）

（2015.10.30）

1930年 創立50周年 西早稲田キャンパス（現在の学園の原風景 大正・昭和前期の大学）



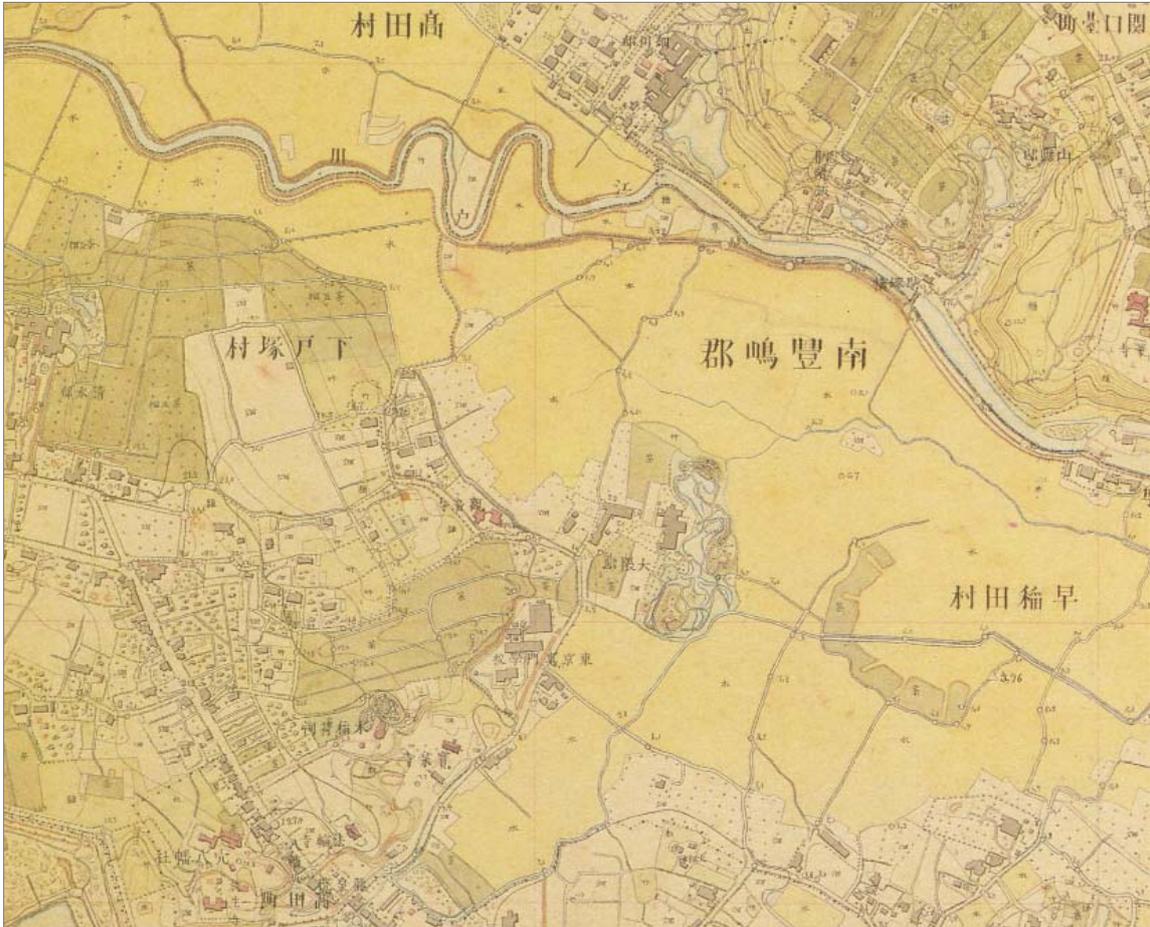
※大隈講堂、図書館、恩賜館（戦災で焼失）、演劇博物館が見える。

早稲田キャンパス全体配置図



資料：「早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館」早稲田大学キャンパス企画部 企画・建設課 2014.09

都の西北（戸塚村）に立地した早稲田大学



※ 中央部に早稲田大学の前身である「東京専門学校」や創立者・大隈重信の別邸「大隈邸」の記載が確認できる。

資料：「五千分一東京図測量原図（東京府武蔵国北豊嶋郡高田村近傍） 明治16年 参謀本部陸軍部測量局」

国際日本文化研究センター所蔵地図データベース (<http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/>) より